佐土原キリスト教会 2023 年 10 月 8 日礼拝説教
聖書箇所 : マタイ福音書 5 章 33～37 節
説 教 題 : 誓わない生活

アメリカから日本に来たばかりの宣教師が「日曜日 10 時から集会をしています。教会に来て下さい」と教会を案内して回りました。そうしたら多くの人が「はい、ありがとうございます」と答えました。彼らは大喜びして日曜日を待ちました。ところが日曜日には誰も来ませんでした。彼らはガッカリしたという話です。日本の文化は、はっきり断らない、一応「はい」とか、「ありがとうございます」と受ける文化です。奥ゆかしい文化なのだと思いますが、突き詰めれば「はい」が「はい」でない、「不真実な言葉の文化」ということになるかも知れません。(ある宣教師は、「『「いつか」遊びに来て下さい』と言われて、『5 日』に訪問したらビックリされた」と言っておられました。それは誤解だったのですが…でも「いつか来て下さい」というのも本当に来て欲しいと思っている言葉ではないでしょう)。いずれにしても私達は時に言葉において真実を欠くことがあるのではないでしょうか。しかし問われるのは、「私は、特に神様との関係で、言葉において真実か、誠実か」ということです。

「キリスト教とは生き方です」という言葉があります。「山上の説教」は「キリスト者の生き方」を教えます。今日は「誓い」についてです。

33 節 :「昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』といわれていたのを、あなたがたは聞いています」。「山上の説教」の背景には、「旧約聖書の律法」と「律法に込められた神の御心を、律法学者やパリサイ人が歪めて教えていた」という前提があります。だから「山上の説教」には「旧約律法に込められた神の本来の御心をイエスが教え直された」という面があります。しかしここにある「偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ」という教えは、「律法」の精神を反映させたものではありました。「レビ 19 章 12 節」、「民数記 30 章 2 節」、「申命記 23 章 21、23 節」等々にこれに関する戒めがあります―(「週報」裏面に御言葉があります)―が、最も近い言葉は「伝道者の書 5 章 4 節」だと言われます。「神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。神は愚かな者を喜ばないからだ。誓ったことは果たせ。誓ったことを果たさないよりは、誓わないほうがよい」(伝道者の書 5:4)。イエスが「あなたがたは聞いています」として引用された「偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ」という教えは、これらの戒めを用いて律法学者やパリサイ人が人々に教えていた、その要約だったかも知れません。そこで中心的に禁止されているのは、誓いの乱用、不履行、偽りの誓い、といったものであり、誓いそのものではありません。しかしイエス様は、それを踏まえた上で「しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません」(34)と言われます。「決して誓ってはいけません」とは、どういうことなのでしょうか。イエス様は、何を語ろうとしておられるのでしょうか。

「決して誓ってはいけません」の背後には、「誓い」についての当時の乱れた状況がありました。当時、人々は、「誓い」を、「絶対に果たさなければならないもの」と「そうではないもの」に分けていたのです。自分の言うことを信じてもらいたい時、ユダヤ人の気持ちとしては「神の名」にかけて誓いたいのです。しかし「神の名」にかけて誓って、それを守れない時は、自分に裁きを招くことになります。だから「守れない時でも裁きを招くことなく、しかも相手に一定の信用をしてもらえる誓い方」というのが盛んに用いられたのです。それが「私は天にかけて誓う」とか、「私は地にかけて誓う」とか、「私はエルサレムにかけて誓う」…という言い方だったのです。それは、パリサイ人や律法学者が「偽りの誓いをしてはいけない」という律法の戒めを、捻じ曲げて、「間違った誓い方をしてはいけない、間違わないように上手く誓いなさい」と教えた結果でした。それはやがて「神の名を使わない誓い方であれば、守れない時は守らなくても良い、神は関わりを持たれない」ということになって行ったのです。

そこでイエス様のポイントは…。彼らは「神の名さえ使わなければ良い」と思っていました。しかしイエスは言われるのです。「天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地をさして

誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、1 本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです」(34～36)。何を言っておられるかというと「あなたが神の名を使おうが使うまいが、世界は神のものであり、神はその場所におられるのであり、あなた自身も神のものなのだ。だから神を自分の都合によって口先で閉め出すことは出来ない―(するな)、あなた方は絶えず神の目の前で生きているのだ」ということです。つまり「どんな誓いであれ、それは神を証人として、神の前で為されたものなのだから、その誓いに対して誠実でなければならないのだ」と言っておられるのです。本来「律法」が言う「偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ」のポイントは、「約束(誓い)に対して誠実でなければならない」ということです。言い換えると「神と人に対して真実、誠実でなければならない」ということです。それに対して「どうやって誓えば守らなくて良いのか」と考えるのは、神の戒めの本質を見失った考え方です。イエスはその間違いを指摘されたのです。

私達はどうでしょうか。神様の前に誠実でしょうか、真実でしょうか。「ミモサ」というインド人女性の話を思います。彼女は少女の時、父親と一緒に町に行き、そこでエミー・カーマイケルという宣教師から、たった 1 度、神様の話を聞きました。その時、神に触れられて信仰を持ったのです。それ以来、自分の田舎の村でも、17 歳で結婚して、嫁いで行った村でも、信仰者の交わりはおろか、神の話を聞く機会もありませんでした。それでも彼女は「神様、私はあなたにつまずきません」と神に約束した、その言葉に生きるのです。どんなに迫害があっても、どんなに試練がやって来ても「私はあなたにつまずきません」と言いつづけ、神を信じ続けます。そして 22 年後、エミー・カーマイケルと再会する時まで、神様に語った言葉に、誠実に、真実に歩み続けたのです。私達はどうでしょうか。

さてしかし、イエス様の教えはそこに留まらない。イエスはさらに言われました。「あなたがたは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ言いなさい。それ以上は悪いことです」(37)。なぜ「誓う」ということが必要になったのか。それは「基本的に人が人を信用していない、語られる言葉の全てを信じるわけにいかない、だから本当に信用出来る言い方を改めて作らなければならなくなった」、それが「誓う」ということであり、様々な「誓約」の制度です。逆に言うと、相手を完全に信用していたら―(完全に信用されていたら)―「誓う」という発想は出てこないのです。

10 年以上前、私達が実家から教会に引っ越してくる時、子供はまだ幼稚園生でした。彼がある店でボールか何かを気に入って「買って欲しい」と言いました。彼がしつこくせがむものですから、私達は根負けをして、「引越しの片付けが済んでから買って上げる」と言いました。そうしたら彼が「紙に書いておいてね」と言いました。私はその口ぶりから「彼は親の言葉をそのまま信用してはいないのだな」と思いました。私達に普段から言葉の不誠実があることを彼なりに感じていた、だから「確証が欲しい、誓いなさい」と言ったのでしょう。反省しました。こんなこともありました。以前の私の説教はもっと長かったのです。「説教をもう少し短くしたいと思います」と言ったことがあります。そうしたらある方が「先生は本気でそう思っているのですか。言うだけじゃありませんか」と言われました。ハッとしました。どれだけ真実、誠実な言葉を語っているか、問われたことでした。いずれにしても私達も心探られるのではないでしょうか。

クェーカーというキリスト教の教派があります。クェーカーの人達は「誓わない」ことで有名だそうです。イエス様のこの御言葉から来ているわけです。しかし誓わない代わりに、「誓わなくても良い生活」をする努力をしているそうです。ジョージ・フォックスという初代のリーダーがいますが、彼がまだ商売をしていた時、取引の中で「…まことに…」とい言葉を使いました。彼は不正をしないことで信用されていましたが、その彼が「まことに」と言ったものですから、「ジョージ・フォックスが『まことに』と言った。それならこれは間違いがない」と皆が言ったというのです。「まことに」の一言が重かったのです。この話を覚えておられるでしょうか。ある会社の社長秘書をしている女性がいました。ある時、社長に電話がかかって来ました。社長は「留守だと言ってくれ」と言いました。彼女は言いまし

た。「ご自分でどうぞ。私は、嘘はつきません」。社長は言いました。「これは業務命令だ」。彼女は言いました。「どんな場合でも、私は、嘘はつきません」。その時は、社長はカンカンになって怒りましたが、しかし、それまで以上に彼女を信用するようになったという話でした。

イエスが言われた「『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ言いなさい」というのは、「偽ってちかうな、誓ったこと果たせ」という教えを一歩進めて、「あなたが正直に生きたら、本当に正直に生きたら、誓う必要がなくなるから、正直に生きてみなさい。『はい』という時は本当に『はい』だけの意味で言い、『いいえ』と言う時には本当に『いいえ』の意味だけで言いなさい。そのように裏表のない真実、誠実な生き方をしなさい」ということです。そして「誓う必要のない、普段から—(言葉において)—誠実、真実な生き方をしなさい」、それが「誓ってはいけません」の意味だと思うのです。それはまた、先程申し上げた「あなたは絶えず神の前で生きている、ということを忘れてはいけない、いつも神の前で誠実に生きなさい」ということの具体的な姿だと言えるのではないでしょうか。

社会生活をして行く時、私達は色々な形で「誓約」を求められます。もちろんこの御言葉の通り「一切誓わない」という生き方が出来れば、それが良いのでしょうが、聖書の中ではパウロも誓っています—(2 コリント 1:23、ガラテヤ 1:20)。その意味ではイエス様の言葉は—(繰返しになりますが)—「何が何でも一切誓ってはいけない」というよりも、むしろ「キリスト者の生き方として、誓わなくても良い生活、普段から真実、誠実な生活をしなさい」というチャレンジの言葉だと思います。

しかしそれは、信仰生活の本質に関わる問題です。「誓わなくて良い生活」とは、それは、自分の都合によって、自分の生活の場から神を追い出したりする生活ではない。その場、その場によって、言葉や態度や生きる基準を変える生活ではない。本当に、どんな時でも、教会の中であろうが、外であろうが、神様と共に生きる、神様の目の前で真実に、誠実に生きる、そのような結果として生まれて来る生き方—(言葉の生活)—だと思います。言うならば「私達が本当は、普段、神様とどのような関係を持っているのか」、その全てが出て来ることではないでしょうか。具体的に「言葉」について言えば、本当に私達の日常の言葉が、神と人に対する真実な、誠実なものになっているのか、神を知っている者の言葉になっているのか、言葉を通して神を神としているのか、それが問われるのだと思います。「イエス様はこの家の主、すべての食事を共にされる見えないお客様、全ての会話に耳を傾けて下さる静かな聞き手です」という詩があります。私達の言葉は、そのように神に聞いて頂いても良いものとして語られるべきものなのだと思います。あまり敏感になり過ぎると苦しくなりますが、しかし、そのように表裏なく生きる時、私達は心の中で人を裏切らなくて済むのです。

もちろん私達が良く知っているように、「偽り」は何より人間関係を破壊します。しかし「偽り」ということではなくても、例えば事実を事実以上に大げさに言ったりすることも、真実な言葉、誰かを立て上げる言葉ではないと思います。(ただ「何でもそのまま言えば良い」ということでもありません。イエス様の時代、あるグループは、「実際には美しくない花嫁を『美しい』と褒めることをしなかった」と言われます)。「エペソ書」には「愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し…」(エペソ 4:15)とあります。「愛の配慮」のある言葉を語ることは大切だと思います。しかし、いずれにしても私達は、言葉においても、神に対して、人に対して、精一杯真実、誠実に生きる、そのような者でありたいと思います。

なぜ、そうあらねばならないのか。もちろんイエス様が戒めておられるからですが、イエスがこのような厳しい基準を語られるのは、イエス様が私達に期待しておられるからです。私達が自分を評価する以上に、イエスは、私達を高く見て下さっているのです。「あなた方は、そのように真実に、誠実に生きることが出来る素晴らしい存在なのだ」と、こんな私達に対して望みを失われないのです。それに応えたいと願うのです。それだけでなく、何よりも「私達が神の真実の中に生かされている」という事実があります。「イエス様が、こんな頼りない、だらしない私のために死んで下さった。イエスは私達に真実を尽くして下さった。神は今も、私のような者にもいつも真実を尽くして下さる」、私達はそれを

知っています。私は「世の光」放送の中でも証しさせて頂きましたが、「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)、この言葉を何度も経験させて頂きました。ある著名な牧師は「この『すべて』にはあなたの失敗も含まれている」と言いました。その通りのことも起こりました。神は、私達に真実でいて下さいます。その愛に応えたい、その神に相応しい者でありたいと願うのです。

さらに私達は、やがて携挙され、天でイエス様にお会いする望みに生きています。天国で暮らす望みがあります。CS ルイスは言いました。「今の世において、神の御心に従う生き方、神の御心に適う行いをした時にだけ身につけることができるような品性を、少なくてもそのような品性の芽を持っていなければ、来るべき世がどんなに素晴らしい環境であっても、私達は、神が備えられた深い、強烈な幸福を十分に味わうことができないだろう」(CS ルイス)。その意味でも、今朝の文脈で言えば、言葉において、神に対して、人に対しても、誠実、真実でありたい、そのようにして神の栄光を表して行きたいと願うことです。それは永遠の意味を持つのです。

最後に一言申し上げて終わります。水曜集会で「アメイジング・グレイス物語」という動画を見ました。私にとって印象的だったのは、アメリカの教会で、白人至上主義者が銃を乱射して 6 人の黒人を射殺した、その追悼礼拝の場面でした。スピーチに立った当時のオバマ大統領は、途中で言葉を失くしました。人間の言葉ではどう言って良いのか分からなかったのかも知れません。彼は「神に恵み」と言って、その後「アメイジング・グレイス」を歌い出しました。そうしたら皆が立って歌い出したのです。それは、「憎しみと復讐ではなくて、神の恵みによって新しい歴史を作って行こう」というメッセージであり、「神の恵みによってそれが出来るはずだ、神の恵みによって何でも出来るんだ」というメッセージでした。そして、1 週間後、被害者の母親は、犯人に会って「私はあなたを赦します」と言ったのです。私は、「神の恵み」についての理解を新しくされるような気がしました。「神の恵み」は、私達を新しい行動に押し出し、またそれを助けて行く、そういう「力」でもあるように思いました。

今日のイエス様の言葉は、私達には難しく聞こえます。しかし、私達にも神の「恵み/アメイジング・グレイス」があります。神の恵みによって、私達も、神様と人に対して、より真実な、誠実な、生き方に踏み出せるのではないでしょうか。